

Rudyard Kipling, 'Baa, Baa, Black Sheep' における

Gothic 小説的要素

森 岡 実 穂

Gothic とは何か。この問いに対しては実に様々な答えが可能であろう。このジャンルの代表作として Horace Walpole の *The Castle of Otranto* や Charles Maturin の *Melmoth the Wanderer* が挙げられるように、最も一般的な漠然たる印象としては、超自然現象を許容し、合理主義を超えたところで人間の感情、特に恐怖をかきたてるものとして捕らえられているのではないだろうか。特に目立つのは、幽霊や怪物、魔物、悪魔の登場などの超自然的な恐ろしい現象、それを暗示するような不気味な城や廃墟といった舞台設定などの具体的な「道具立て」であろう。そのような要素は 18 世末から 19 世紀初頭の狭義 Gothic の時代にとどまらず、Victoria 朝のリアリズム小説、センセーショナル小説のどちらにも受け継がれ、今日まで命脈を保っている¹⁾。

どうしても目に付くのはこうした恐怖の為の設定だが、その根本にあるのは合理主義的世界観への疑いであると言われている。幽霊のヴィジョンや不気味な声などの「超自然現象」とは、そこに描かれている社会の規範、そこで通用している「合理」の体系が不条理に抑圧しているもの、周縁に追いやられた「他者」が歪んだ形で表出しているというのがひとつのパターンである。しかしもっと恐いのは、結局のところその社会規範、通用している「合理」の体系が、ひとたび過剰な暴走を始めたときに人間に与える sublime な恐怖のメタファーであるとも考えられる場合である。正常/異常の「境界」そのものが、境界侵犯の不安ゆえに過剰な identification に走ってバランスを崩した「正常」の側から侵犯されてくるあり得べからざる事態に対し、人間は底知れぬ恐怖を感じるのである。

このようなパターンは Ann Radcliffe、Charlotte Brontë、George Eliot らの書いた、家庭内の domestic な人間関係に生じる恐怖に重心の置かれた Gothic 的作品群に特徴的である。Ann Radcliffe の *The Mysteries of Udolpho* は Gothic 小説としては最も有名な作品のひとつであるが、ここでヒロイン Emily が後見人である伯母の夫 Montoni に Udolpho 城その他の場所に監禁されて受ける脅しは、家

父長制下での女性を管理する父権の歪曲化された膨張であり、一応の「正当性」が過剰になり悪用される事の恐怖が描かれている²⁾。Charlotte Brontë の *Jane Eyre* では、Reede 家の母親、Lowood 孤児院での Blockheurst 氏は言うまでもなく、宗教的義務という正当性の下に Jane に彼女の感情を抑圧して自分と結婚することを静かに要求する St. John Rivers が存在する。George Eliot に関しては Joseph Wiesenfarth が *Gothic Manners and the Classic English Novel* (1988) で *Middlemarch* 論で「社会の manners が人間を閉じこめる牢獄になる」という Gothic 小説としての読みを示している³⁾。

Kipling の Gothic 的小説群、そして特に 'Baa, Baa, Black Sheep' (1888) は、その構造の内にこれらの domestic な関係をめぐる Gothic の系譜に連なる要素を持っているのではないだろうか。この短篇に関しては、相当にはっきりと自伝的な経験的要素が創作に関わっているが故に、伝記的、精神分析的なアプローチは意欲的に取り組まれてきたが⁴⁾、その一方で先行の文学伝統との系譜を探るようなアプローチは避けられてきたきらいがある。しかし逆にこの短篇は、インドや戦争を直接題材にした他の作品とは違った家庭内のドラマであるからこそ、「なぜ自分には世界がちゃんと見えないのか分からない」という Gothic の祖型的な不安、「合理的体系」が過剰に走ってまともでなくなる、domestic な人間関係の中で起こり得る sublime な瞬間などが見いだされる可能性があるのではないだろうか。Kipling の Gothic 性と言えば Patrick Brantlinger が *The Rule of Darkness* (1988) の中で提示している 'Imperial Gothic' の文脈で考えるのが普通ではあるが⁵⁾、本稿では、'Baa, Baa, Black Sheep' という短篇において Kipling がどのように先行する domestic な Gothic のパターンを踏襲したのかを検証してみたい。また一方で、そうした先行の Gothic とのズレの部分も探ってみたいと思う。

1

‘Baa, Baa, Black Sheep’は、まず、子供の視点を利用して「突然起こる認識の混乱と不安」という Gothic に欠かせないテーマを展開している。『いつもの自分の認識では世界がうまく理解できない、見えるべきように見えないし、見えないはずのものが見える』という、知的理解と知覚的認識とが両方不安になる恐怖が Gothic の恐怖の扱い方のひとつのパターンである¹⁹⁾。言うまでもなく、この状況を作り出すのに、子供の未発達な意識はうってつけである。子供の目や心にはどんな物でも事でも大きくデフォルメして見えてしまう、というのは既に Charles Dickens が *David Copperfield* や *Great Expectations* で使った手法である。それが Dickens の日常世界を異形の世界に反転させるトリックであり、彼の作品の Gothic 的な雰囲気を作り出すのに効果的な方法であった。この Kipling の短編でも、「大人」の場合と比較しての、「子供」が放りこまれるこのような状況の特殊性についてテキストが十分自覚的である事は、以下の部分に明白である。

When a matured man discovers that he has been deserted by Providence, deprived of his God, and cast without help ... upon a world which is new and strange to him, his despair, which may find expression in evil-living, the writing of his experiences, or the more satisfactory diversion of suicide, is generally supposed to be impressive. A child, under exactly similar circumstances as far as its knowledge goes, cannot very well curse God and die. It howls till his nose is red, its eyes are sore, and its head aches. Punch and Judy, through no fault of their own, had lost all their world.(p.266)²⁰⁾

既に何らかの確たる内的判断基準を備えている大人には、突然自分を取り巻く状況が変化し彼を攻撃したとしても、多かれ少なかれそれを相対的に批判する事ができる。圧倒的な歪んだ吸引力に対して苦しみを感じつつも、その状況をある程度相対化し、客観視する事が可能なのである。しかし子供は、自分の判断基準がまだ確立していず可塑的なので、その歪みを真正面から受けなくてはならない羽目に陥ってしまう。

人間は経験をもとに世界観を作り上げていく。まだ5年をインドで生きたにすぎなかった Punchにとって、世界はインドの実家の家庭内であり、世界のルールとは、彼を愛してくれる両親の定めたものだった。まだ5歳の

彼の視野は当然狭い範囲にしか届かず、その中で彼はこの年齢に相応しい全能感を感じることを許されて生きてきた。冒頭、インド出発直前の召使たちとのシーンでは、Punchが幼いながらに、自分に起こることを過去の経験に照らし合わせて認識しようとしているのが分かる。自分はどこかに行かされるのだと聞くと、彼は自分にとって「遠いお出かけ先」を意味する ‘Nassick’ へ、しかも今までの外出同様わずかの間行くのだと理解する事ができるのみで、実際それから彼に起こる事は全く彼の経験的知識の範囲を超えていた。インドを出るや、彼らの既知の経験則は情けないほどに役に立たなくなってしまう。イギリスに到着し、Downe Lodge というところで子供たちは新しい養い親に引き合わされるが、まずこの人たちの存在が自分にとってどういうものなのかが理解できない。

‘I’m to call her Antirosa, but she doesn’t call me Sahib. She says just Punch,’ he confided to Judy. ‘What is Antirosa?’ (p.265-6)

‘Antirosa’ というように彼が ‘Aunty’ と ‘Rosa’ を分節できない、そしてそれ以前に ‘Aunty’ とは何かを知らないという事は、まず Punch の世界が本当にインドの核家族の内部に限られていたという事、そしてその結果、彼が今のところ持っている知識ではこの状況は分節=理解不能なのだという事を示す。

この作品での語り手には、Kipling の作品ではいつもの事だが、二種類の語りの声が存在する²¹⁾。ひとつは最初の引用のように、Punch たちの状況について客観的にコメントする声であり、もうひとつは Punch の思考に寄り添った声である。後者の語りでは、簡単な言葉遣いと、文章間での論理展開の短絡さが特徴的である。子供には、表現に使える言葉や因果関係のパターンが少なく、複雑な世界がうまくいろいろなレベルで分節出来ないのである。子供の未発達な頭脳自体が、状況の複雑さについていけず普通以上の理不尽感や不安を生み出していると言える。既存の「合理的」認識体系中での位置の確認が「理解」なのだとすれば、子供の場合はそもそも、その持っている体系がまだ大雑把すぎてそれ自体が「合理」に達していないのである。このもどかしさが距離を置いて把握できる立場にある、大人である語り手と読者にとって、「子供であること」はひとつの Gothic 的な状況の可能性として映る。

この物語では、Punchの視点のせいだけではなく、彼の現実世界認識への脅威となる事態が実際にも生じている。Downe Lodgeで起こった事は、全く「家庭が牢獄に変化してしまう」という domestic な世界を中心テーマとした Gothic の流れに添うもの、もしくはそのパロディである。パロディックに見えてしまうのは、性的な役割がずらされているからである。迫害されるのは若い乙女ではなく少年、迫害するのは家父長ではなく家庭の守り手である主婦である。Punchが「子供」であるが故に、閉鎖空間の中で男が女に権力によって恐怖にさらされるという構図が出来上がってしまう。しかし一方で、確かにこれはある意味でこの種の Gothic の本流に添っているとも言える。これはつまり、父権制度下での「男性=外での仕事/女性=家庭の守り手」という性的分業が是認する、女性の役割上の「権力」が、適切な範囲を超えて暴走しているという状況なのであるから。適切な範囲に留まっていれば望ましく正しいはずとされる事が、過剰になる事でせっきくの「正常/異常」の差異基準を破壊し、脅威を与える異常な存在となってしまうという domestic な閉塞状況下での Gothic の根幹的パターンにはまっているのである。

ここでの暴走する過剰な権力者は言うまでもなく、硬直した宗教観に縛られた狭量な心 ('narrow mind' p.273) の持ち主として描かれている Auntie Rosa である。彼女は、聖書を基本とし、清教徒的な清廉な生活を旨とし、福音の教えを国内外に広める事に献身的であった、いわゆる福音主義の極端に歪曲された体现である¹⁰⁰。福音主義運動は、19世紀前半の最盛期にはヨーロッパ諸国からの非ヨーロッパ世界へのキリスト教伝道活動を中心となって支えたものだった。また、特に19世紀の子供の教育という分野に関しては、学校制度や児童文学の発展がこの運動に多くを負っている点は忘れられるべきではないだろう¹⁰¹。だが、世紀後半には聖書論争やオックスフォード運動の影響、また優秀な後継者の海外流出などのため勢力を失い、ただ頑迷なまでに厳しい生活信条、宗教への献身や伝道への熱狂的態度などばかりが、「流行遅れ」のイメージとして残る事になる¹⁰²。読書と言えば聖書ばかりを奨励して娯楽物語は認めず、黒い服を着て「乾いてひびわれた唇」をした彼女は、確かに質素を旨とし過度なまでに生活の「うるおい」となるような事を「贅沢」として避けた福音主義の教えにしたがっている存在なのではあろう。その限りでは、

彼女は善意の人であるかも知れない。しかしそれが明らかに行きすぎてバランスを失ってしまい、結果として彼女は「家庭の天使」ではなく、教育の名の下に不条理に子供を虐待する「悪い魔女」という印象を与えている。このように、家父長制度の保障する権力は、極端な「家庭の天使」Auntie Rosaに握られ、Punchの上に過剰に振り回されるのである。家庭という閉鎖空間での、女性の権力の脅威的な膨張の可能性が、ここでは追求されている。

必然的に、対する家父長は弱体化している。彼女の夫 Uncle Harry は、戦争の時に負傷した元海軍の傷痍軍人で、家庭内政治においてもリタイアしてしまった感のある静かな男性である。彼の属する「船乗り」というカテゴリーは cannibalism や sodomy などの侵犯行為を連想させる Gothic 的表象のひとつである¹⁰³。そこまで極端な話でなくても、19世紀後半に広く読まれた少年向けの冒険小説のかかなりの部分は船乗りの冒険であり、彼らには何か危険な非日常の物語を持っているというイメージがあったと考えて良いだろう¹⁰⁴。しかしそのような危険さは、彼に関しては残っている様子はない。確かに彼は海賊でも何でもない単なる海軍兵士のひとりだったに過ぎない。それでもそれなりに彼には彼の「トルコ軍と戦った軍人としての物語」があるはずなのだが、家庭という空間の中では彼の発話は妻によってまったく抑圧されてしまっていて、自分の乗った船の模型を見て思い出にひたるか、せいぜい Punch と散歩に出掛けるときに僅かにこぼされる程度である。

'She is a model of the Brisk — the little Brisk that was sore exposed that day at Navarino.' The grey man hummed the last words and fell into a reverie. 'I'll tell you about Navarino, Punch, when we go for walks together...' (p.265)

ここでは imperial Gothic の可能性は domestic Gothic に骨抜きにされてしまっているのである。彼の Gothic は、その死の直前に、聞こえないはずの自分の歌を Punch に聴かせることで一瞬作動する。海の男の表象と歌とは切り離せないものだが、ここでは奇妙にも勇ましきよりもむしろ Punch を「別の物語」の世界——後述する、フィクションの世界——に誘うセイレーンの歌のような引力の方が強く感じられる。この点については後でもう一度論ずる。

一方、Punch より少し年上の少年である Harry は、Auntie Rosa の使い魔のような存在となる事によって権力

の側に地位を確保する⁽¹³⁾。彼は、当然ながら、この生まれ育った環境の規範を何の疑問もなく完全に内面化しているので、子供であっても彼にとってはここは全く明快に理解可能な閉じた世界である。Harryは、夜中のPunchが肉体的に疲れきった所での尋問が得意だが、これはイギリスの文学伝統上に悪名高いカトリックの異端審問を思わせるものがある('Harry was at once spy, practical joker, inquisitor, and Auntie Rosa's deputy executioner.' p.278)。これは、権力を持った側の institution が傲慢な暴走をしがちだという事を描く際の18世紀Gothicの定番装置だった⁽¹⁴⁾。19世紀末のこの作品では、Harryをこのイメージと重ねることにより、閉じた世界で安心している人間の残酷さもまた、「子供」特有の残酷さを利用することで効果的に表象しうる事が示されている。

このような家庭という空間の閉鎖性は、ただでさえ少ない登場人物が、充満したように登場し続ける文章に如実に感じ取られる。この作品は、短篇という事情もあるが、出来事の周辺の細かい状況描写が少なく、他の人物がPunchとの絡み以外で描かれることはまれである。次から次へとAuntie RosaとHarryによる攻撃が並べられる様は、彼が一步步くたびに圧倒的に高い行き止まりの壁に阻まれているような圧迫感を感じさせる。

3

この閉塞した世界でのPunchの唯一の逃避口は、彼がむさぼるように読む本によって与えられる。Punchの取ったこの対応は非常に妥当なものと言える。物語を読み、更に自分で話を作ることは、秩序の設定された世界を自分で頭のなかに作ることである。秩序を存在させることが不条理の恐怖からの脱却の第一条件であるのだから⁽¹⁵⁾。それはどこか別の世界、Punchにとって安全で完結した世界への憧れと言えるかもしれない。この「豊かな想像力によるフィクションへの逃避」もまた、Gothic victimのひとつの典型的パターンである。

Auntie RosaはPunchがさまざまな物語を読むことを良く思っていないが、これは当然である。彼女の見当違いに頑迷な福音主義的教育は、そのごく狭量な宗教感に基づいた世界観を内面化させる事を目標としており、彼が自分なりに「世界を読む」事を基本的に禁じているのであるから。フィクションの中でさえ、「別の読み」を学ばれては困るのである。ましてや自ら世界を創造するなどといえば重罪であろう。彼が天地創造につい

て、インドの妖精物語と聖書の話を混ぜ合わせてJudyに話したという時、Auntie Rosaは大変怒るが、その種の違反の取り締まりはこのような教育観にとっては重要なものである。

実際Punchにとっては、物語を読み知識を得て、Auntie Rosaの押しつけるのとは別の「世界の読み」を作ることが唯一の精神的な生き残りの方法だった。彼は次第にAuntie Rosaの世界のルールを飲み込み、やがて巧みな嘘の話を作るという方法で一種の反撃に出る。その世界での意味の分節方法を理解し覚えていくことと考えれば、「成長」と呼べないこともないだろうが、彼の場合は理解した秩序があまりに自分にとって不合理なものであったため、それを透明に内面化するのではなく、そのルールを前提として理解した上でこのように裏をかく「別の読み」を試みるに至ったのである。Auntie Rosaの教育は最も皮肉なかたちで実を結んだと言える。

Punchにとりあえず「家庭」以外の物語に生きる可能性を具体的に示したという点でUncle Harryの功績は大きい。元海軍軍人であったUncle Harryは、前に触れたように、潜在的にはimperial Gothicを産み出し得る存在であるはずである。しかしAuntie Rosaの支配する家庭では、彼は何を語ることも出来ず、物語は抑圧されたまま産まれることはない。それでもPunchと散歩に出掛けるときだけは彼は昔の物語を語り、彼が自分らしくいられたのであろう海軍軍人としての世界という全く別の世界の存在を少年に示してくれた。「家庭」では彼の居場所はないが、「戦場」という男の世界では海軍軍人として自己を意味付けることが出来たのである。しかし、戦争が終わり、死ぬわけではなく身体を壊し、彼はそこでの自分の物語を中断しなくてはならなかった。彼が歌う軍歌と体の中の弾丸の断片こそ、彼が持っているはずの物語の断片である。戦場での傷がいよいよ悪化して死に至る時、戦場で美しく完結できず、語られることもないまま結末をただ遅延してきた「兵士の物語」がやっと完結する。この時、Uncle HarryがPunchにだけ教えたという軍歌が聞こえてくる。Punchは、何に対してだか分からないながら恐怖を、同時に興奮をも覚え、その声に誘われ唱和している(p.276)。この歌は、彼にだけ聞こえたものなのか本当に歌われたものなのかははっきりしない。この短篇中最も超自然的な含みを持つ部分だが、彼にとっては不条理な迫害に満ちた現実よりも、このようなフィクションを通しての「ここではない別の世界」への誘いの方がよっぽど抵抗無く受け入れられるのだという、彼の精神の状態が察さ

れるエピソードである。

4

『いつもの自分の認識では世界がうまく理解できない、見えるべきように見えないし、見えないはずのものが見える』という、世界に関する知的理解と知覚的認識とが両方不安になる恐怖は、それまでの Gothic の場合のように比喩的にはなく、誠に現実的な形で Punch を襲うことになる。

学校でいじめてくる生徒を殴り、更に Harry を殴った罪で、Aunt Rosa 達は彼を置いて旅行に出てしまった。その休暇中、確実に視力を悪化させつつも邪魔の無い分書物の世界にひたる一方で、Punch はひたすら家中の手摺りの数を数えあらゆる部屋の寸法を手で測るという、神経症的という以外に説明のつけようもなさそうな意味のない行動に没頭する。現実認識のための分節の尺度が分からなくなってしまった混乱しき彼の精神には、これくらい無意味ではあるが具体的な「秩序の確認」が必要だったという事であろう。旅から帰ってきた Judy に、Punch はいかにも大発見というようにこの計測の結果をこっそり報告する ('Black Sheep confided to her ...He had found it out himself.' p.282)。現実的には全く意味のない行動であるだけに、彼が示す得意さと興奮は異様でも哀れでもある。「測る」という行為が、彼が客観的に自分の行為の意味を測れなくなっている事を示してしまっているのである。

この頃 Punch はカーテンの影やドアのばたばたいう音、よろい戸のきしみなど Gothic の典型的な恐怖のもとに怯えるようになる。これらの小道具には、多少意識的にパロディックにはあるが、明らかに Gothic の伝統とのつながりが認められる。

There was a grey haze upon all his world, and it haunted month by month, until at last it left Black Sheep almost with the flapping curtains that were so like ghosts and the nameless terrors. (p.282)

ただのカーテンが幽霊や 'nameless' な恐ろしいものに見えるという事は、つまり現実世界が自分の認識体系では名指せない=分類出来ないという事を意味している。しかし彼の場合、それは比喩的な意味に留まらず、現実的な肉体機能の障害として表出した⁽¹⁸⁾。

見えるはずのない幽霊や怪物が見えてしまったり、な

んでもない風景が視界不明瞭で異常に不気味に見えたり、見えるはずのものが見えなかったりといった知覚認識の混乱による感覚的な恐怖は、Radcliffe から Victorian の小説に至る、合理的説明を受け入れるタイプ Gothic 小説の世界では、あくまで自分の認識基準と周囲の認識基準とが一致しないために世界観が揺らぐことのメタファーと考えられ、主人公たちは実際には肉体的被害からは守られている事がほとんどである。Punch の場合にはその不一致が原因での、半ば過剰な読書の結果、半ば精神的な影響で、実際に文字通りに視覚が失われてしまうという結果がもたらされている。かつての作品では自己と周囲の「ズレ」に対する教育的な脅しでしかなかったものが、ここでは既に「ズレ」の結果が身体の文字通りの現実的不適応として起こっている。被迫害者の置かれた状態のより一層のグロテスクさは、それだけこの物語の抱えている Gothic 的な境界不安が肥大している事を示しているのではないだろうか。

5

子供の視点を用いて世界の見え方を変えるという手法は、前述のように確かに既に Dickens も使っている。しかし彼の場合は、子供はあくまで同情の対象にとどまり、センチメンタルな感情をかきたてるものでなくてはならなかった。「犠牲者」の立場を大胆に踏み越えることはなかなかできなかったと言って良いであろう。しかし Kipling の Punch は、なぜか自分にとって恐ろしいものに変貌してしまった世界の「犠牲者」であるに留まらず、自分自身の方もまた周囲に対して不気味な「脅威」となり得るというスタンスも示している。

おおむね、Victoria 朝までの domestic な世界での Gothic では、恐怖の与え手を引き受けるのは主人公ではなく、主人公の抑圧すべき一部、もしくはその属する社会規範そのものを怪物化した分身であったと言って良いだろう。前者の例としては Emily にとっての Laurentini di Udolpho、Jane Eyre にとっての Bertha Mason⁽¹⁹⁾、後者の例としては Emily にとっての Montoni、Jane にとっての St. John Rivers、Dorothea Brook にとっての Edward Casaubon 等が挙げられる。逆に言えば、彼女たち主人公はそれだけ直接に「恐ろしいもの」であることから遠ざけられてきていたのである。彼女たちの役目は恐ろしいと「思う」ことであり、基本的には自ら恐れられることではなかった。そのように自らの安全を確保さ

れた上で、分身による経験を通して、必要な知識は得る事によって最終的な現実との妥協に至っていたのである。

この作品でも Auntie Rosa という形で抑圧的社会規範が怪物化しているのは確かなのだが、被害者が「少年」であった点が若干の条件の変化をもたらした。彼が時を経て成長することによって、迫害者との身体的な力関係に逆転が起き得るのである。これは「家父長/少女」の関係では起こることの無かった新しい展開である。

19世紀後半、文学の中の「少年」は、優秀な大人予備軍としてのよく働く肉体、適切に管理されるべき身体を与えられ始める⁽²⁰⁾。Thomas Hughes の *Tom Brown's Schooldays* (1857) 等のパブリック・スクールものの少年学園小説では、Muscular Christianity の影響で、少年たちはある程度品良く飼い馴らされた形ではあるけれど、スポーツや喧嘩を通して、「力のある肉体」を持った存在として書かれ始めている⁽²¹⁾。R.M. Ballantyne や R.L. Stevenson、G.A. Henty などの冒険小説の世界での彼らの活躍は言うまでもない。同時に、子供とは無意識に残酷なものであるという点も忘れられてはいない。彼の Punch という名前は、もちろんあの人形芝居の Punch and Judy から来ているはずである。子供相手の人形芝居ながら、その内容は無邪気に凄惨なもので、「Punch」はすぐに人を殴り、時には殺してしまう男である。この名前は「子供」が潜在的に持っている無意識の暴力性を暗示していると言えるだろう。

それまでの domestic な関係をめぐる Gothic 小説のパターンにおいては、教育・啓蒙・管理されるべき「他者」とは、若い乙女の事であった。19世紀も進むにつれ、さまざまな領野における進化・発達段階の議論がにぎやかに行なわれるようになり、「女性」の他に更にいくつもの「他者」コードが大きく扱われるようになる。この時は「教育・啓蒙」に関するディスコースが拡大する時代である。それはつまりその対象となる「子供」「労働者」「非西洋人」には「教育・啓蒙が必要である」存在だという判断に基づいており、西洋人のブルジョワ紳士を中心にした差異分布地図の確立と裏表となっている⁽²²⁾。教育はそうした優劣関係の確認及び確立行為でもあった。

しかし同時に、他者として括り出した時から、所詮人為的な括りでしかない差異のルールをいつ無効化されるかが恐れられることになる。しかも「教育」は、その時点で優劣の確認である一方、せつかく差異化し

たものを将来のいつか同一に引き上げようとする努力でもある。「子供」は、「女性」「労働者」「非西洋人」がそうであったように、もうひとつの「潜在的な境界不安の可能性を秘めた存在」の強力なメタファとなった⁽²³⁾。Lewis Carroll の Alice や Henry James の諸作品の主人公達、Thomas Hardy の Jude Fawley など、19世紀後半の文学にはその種の子供が沢山存在する。そして Kipling の Punch の場合には、本人にも把握しきれない成長途上の肉体の力が、本人に対しても周囲に対しても、文字通り力関係の境界を揺るがし、恐れを産み出すものとなっている。

いじめられ続けた Punch はいつしか捨身の反撃に出るようになっていく。前述した学校での殴打事件の際には「盲目的な怒り」‘in blind fury’ (p.278) にまかせて自分をいじめた生徒が倒れたところを窒息させようとしたとあり、彼が現実的理性を失っていた事を指す盲目のモチーフが見られる。彼にとって他の人々の常識が意味のないものとなり、コントロールを離れた肉体が恐ろしい力を示し始めたとはっきり感じさせられるのが、「ではあなたを殺しましょう」と Harry に、また後に Auntie Rosa に言い放つシーンである。

‘All right’, said Black Sheep, picking up the table-knife. ‘Then I’ll kill you now. You say things and do things and — and I don’t know how things happen, and you never leave me alone — and I don’t care what happens!’ (p.280)

彼を強くしたもう一つの要因は、自分にも他人にも「死」という可能性があるのに気付いた事である。ここでは、当然あるべき死に対する生の優越という前提が危うくされている。実際のところ Punch にとって肉体の生とは視力の衰えや誰かからの折檻の受け皿でしかない以上、精神の半殺しよりも肉体の死のほうがまだましと思える瞬間があるという事であろう。どういうルールで動いているのかどうしても分からない世界に閉じこめられ、フィクションの世界にやすらぎを見出だそうとしても肉体を担保に取られているというような、どこまでも出口の無い状況下、Punch はいっそのこと自分も他人も肉体ごと消去してしまい全てをキャンセルしてしまおうという結論をさえかき見してしまう。ノアの方舟の玩具をなめての自殺未遂は、混沌とした世界を一度すべて抹消して建てなおしたいという願望の表れであろう。このように、時間の経過によって彼に与えられた肉体的優越は、追い詰められた不安定な精神と連

動し、Punchを一転して恐怖を与える側に回らせている。

読者にとって Punch は、家庭という監獄に閉じこめられた、共感すべき Gothic 的恐怖を感じさせられる客体であると共に、成長しきっていないゆえに未知の力を秘めた「子供」の不気味な暴力性を示す Gothic 的恐怖を与える主体でもあると言える。Punch をどう捕らえるかについての困惑とは、読者にとっての主人公のアイデンティティに関する境界不安であり、この落ち着きのなさこそが最もこの作品独自の Gothic 性と言えるものであるのかもしれない⁽²⁴⁾。

6

Punch の苦難は、様子を見にきてくれた Inverarity Sahib の通報にインドからはるばる駆けつけた実の母親によって終わりを迎える。これは、Inverarity Sahib という father figure の仲介を経てではあるが、最後もまた「Bad Father による恐怖と混乱を Good Father が回復する」という家父長制度下での Gothic の代表的プロットの、性別を父から母に反転させたパターンの適用となっている。しかしこれは一応の安堵でしかない。最後の一パラグラフ、解説者としての語り手が表に出てきて、Punch に一応与えられた安定した世界観の有効性をはっきりと疑ってみせる。

Not altogether, O Punch, for when young lips have drunk deep of the bitter waters of Hate, Suspicion, and Despair, all the Love in the world will not wholly take away that knowledge; though it may darkened eyes for a while to the light, and teach Faith where no Faith was. (p.288)

この経験から Punch に与えられた知とは、ある「合理」体系・規範への妥協的順応ではなく、世界自体の不条理、「合理」の不在の認知である。‘Baa, Baa, Black Sheep’に描かれた Kipling の Gothic とは、実に沢山の先行する domestic な Gothic 小説の要素を踏襲しつつ、合理の体系をあてにできないそのような世界で、あくまで相互的な関係性の中で、恐怖を与えたり与えられたりによって生成していく Gothic であると言えよう。最早一方的に恐怖を与えたり与えられたりという単純な世界は存在しない。Love というものが世界に一貫性を与えるという錯覚を一瞬もたらすかも知れないが、そこは実際には誰が誰の恐怖の主体として立ち上がってもおかしくない、誰もが自己に関する規定から過剰にはみ出し他

を驚かせ脅し得る世界なのである。

NOTES

- (1) Gothic 小説の総論としては David Punter, *The Literature of Terror: A History of Gothic Fiction from 1765 to the present day*. (Longman, London and New York, 1980)、Maggie Kilgour, *The Rise of the Gothic Novel*. (Routledge, London and New York, 1995) 等を参照。
- (2) 適切な限界設定を超えてしまう事が恐怖につながる事については、例えば Kilgour は 18 世紀 Gothic 小説の反物質主義、反個人主義の側面から次のような指摘をしている。‘The gothic villain is frequently an example of the modern materialistic individual taken to an extreme, at which he becomes an egotistical and wilful threat to social unity and order.’ (Kilgour, Ibid. p.12)
- (3) 拙稿『*The Mysteries of Udolpho*における Emily の感情教育』(東京大学大学院英文学研究会「リーディング」16号、p.16~29) 参照。
- (4) Joseph Wiesenfarth, *Gothic Manners and the Classic English Novel*. (The University of Wisconsin Press, Madison, 1988), p.21~22, p.103~119
- (5) Leonard Shengold, M.D. ‘An Attempt at Soul Murder: Rudyard Kipling’s early life and work’ in *Critical Essays on Rudyard Kipling*. Harold Orel ed. (G.K.Hall & Co.; Boston, Mass.; 1989) は、この作品について精神分析的なアプローチを施している。
- (6) Patrick Brantlinger, *Rule of Darkness: British Literature and Imperialism, 1830 - 1914*. (Cornell University Press, Ithaca and London, 1988) p.227~253.
- (7) 例えば David Punter の以下の指摘を参照。‘in Gothic fiction, the distortion of perception caused by excessive sensibility is situated in dialectical relation to the further distortion occasioned by social isolation. ... this dislocation from everyday norms is a prevalent general feature of tragedy ...’(Punter, Ibid. p.77); ‘sensibility and distorted perception are perhaps always closely linked’(Punter, Ibid. p.78)
- (8) 引用は全て Rudyard Kipling, ‘Baa, Baa, Black Sheep’ in *Wee Willie Winkie* ed. with an introduction and notes by Hugh Haughton (Penguin Books, London,

- 1988)による。以下文中カッコで示す。
- (9) 二種類の語りについては Zohren Sullivan, *Narrative of Empire: the Fictions of Rudyard Kipling*. (Cambridge University Press, Cambridge, 1993), p.15 ほか。
 - (10) 福音主義については *The Oxford History of Christianity*. ed. John McManners (Oxford University Press, Oxford, 1993) p.351~2. を参照した。
 - (11) 福音主義の教育への影響については、J.S.Brattin, *The Impact of Victorian Children's Fiction* (Croom Helm, London, 1981) p.14~16
 - (12) 例えば Thomas Hardy, *Tess of the d'Urbervilles* (1888) の Reverend Clare への言及や Alec d'Urberville の描き方を参照。
 - (13) H.L.Malchow, *Gothic Images of Race in Nineteenth-century Britain*. (Stanford University Press; Stanford, California; 1996) p.96~110.
 - (14) 少年向け冒険小説については Joseph Bristow, *Empire Boys: Adventures in a Man's World*. (Harper Collins Academic, London, 1991) を参照。
 - (15) Shengold は Harry を '[Aunt Rosa's] phallic extension'(Ibid.,p.109) と評している。
 - (16) 18、19 世紀の反カトリック表象については Colin Haydon, *Anti-Catholicism in Eighteenth-Century England*. (Manchester University Press, Manchester, 1993)、D. G. Paz, *Popular Anti-Catholicism in Mid-Victorian England*. (Stanford University Press, Stanford, 1992)、Victor Sage, *Horror Fiction in the Protestant Tradition*. (Macmillan Press, Basingstoke and London, 1988) 等参照。
 - (17) Hugh Haughton は、自分を受け入れない Aunt Rosa の narrative を脱し、インドでの家族との primary world を補償するために、'Punch hungers for his own stories to resist and master the unacceptable in the alien Rocklington world.' (Ibid. Introduction. p.53.) と述べている。Rosa 達が福音主義的な聖書の「読み」に留まるのに対し、Punch は更に narrative を作り出したという点で対抗していたと考えられている。想像の世界への逃避と Aunt Rosa への反撃に関してはこの Haughton の Introduction が詳細に論じているので、この論稿では具体例は省略する。また Sullivan も、*Something of Myself* に関する言及で、同時代の Kipling にとって書くことは 'to control the chaos of experience and defend himself against any further varieties of self-loss' (Ibid. p.34) だったと指摘している。
 - (18) 盲目というテーマについては Sullivan が取り上げている。*Something of Myself* でのこの場面との対応箇所での Kipling 自身の神経性視覚異常について、彼は Southsea では常に他者の視線の対象としてのみ自己を構築していた為、その視線の主がいなくなった時に自己の存在が失われたことを示すと解釈している (Ibid. p.15~6)。全般的には、盲目というモチーフはアイデンティティの不確実という問題に直面を避けるために用いられていると Sullivan は考えている (Ibid. p.40)。
 - (19) Sandra M.Gilbert and Susan Guber, *The Madwoman in the Attic: The Woman Writer and the Nineteenth-century Literary Imagination*. (Yale University Press, New Haven and London, 1979. rep. 1984) p.356~362.
 - (20) 少年の表象において肉体性が前景化されてきた事については、Bristow, Ibid. p.53~92, Sullivan, Ibid. p.32, Robin Jared Lewis, "The Literature of the Raj", in *Asia in Western Fiction*. Robin W.Winks and James R.Rush eds. (Manchester University Press, Manchester, 1990), p.53~70.
 - (21) Norman Vance の *The Sinews of the Spirit: The ideal of Christian Manliness in Victorian literature and religious thought* (Cambridge University Press, Cambridge, 1985) によれば、Hughes は出版社への手紙で自らの意図を 'to work up to moral manliness by way of sturdy manliness' と記していた (p.144)。肉体的な男らしさは確かな精神性・倫理性の基盤として肯定された。
 - (22) 例えば James R. Kincaid は *Child Loving: The Erotic Child and Victorian Culture* (Routledge, New York and London, 1992) で、「子供」という概念がいかに巧妙に構築された「他者」であったかを論じている (特に p.61~103)。もっとも Kincaid の論の重点は「だからこそ『子供』概念の確立への努力が顕著なのだ」というところにあるのだが。Peter Coveney も、Victoria 朝後期の子供像は、ロマン派的な大人との連続意識を失って、逃避可能な「他者」としての固定への動きが目立つと述べている (*The Image of Childhood: A study of the Theme in English Literature*. Penguin, Hammonds Worth, 1957)。しかし少なくとも両者とも、そうした差異化のために非常に多大なエネ

ルギーを注いでいる点に、その差異自体の不安定さを見ることが出来るだろう。

- (23) 女性の場合については例えば Nina Auerbach, *Woman and the Demon: The Life of a Victorian Myth*. (Harvard University Press; Cambridge, Massachusetts; 1982)、被植民者の場合については例えば David Spurr, *The Rhetoric of Empire: Colonial Discourse in Journalism, Travel Writing, and Imperial Administration*. (Duke University Press, Durham and London, 1993) など参照。
- (24) この作品では、最もエキゾチックで Gothic 的であるはずの「インド」は、むしろ Punch が追放されてきた楽園となっている。Punch はインドで育ったイギリス人、Anglo-Indian と呼ばれる存在である。彼はインドにあっては支配階級の人間の子供であり、「イギリス」に属するが、イギリスに戻ればインドで育った子供であり、離れて5年も経っても黒人の事を hubshi と呼んでいるように根本で「インドでの経験」を引きずって生きている。彼のアイデンティティはその時々の母集団との差異によって決定される可変的なものである。このあいまいさは、彼自身はもちろん読者にとって、Punch はどのような立場で世界と関わっているのかという、この作品の不安定な感覚のもととなっている前述の問題を反映している。